

図書紹介

Clifton R. Wharton, Jr.: *Research on Agricultural Development in Southeast Asia*. The Agricultural Development Council, Inc., New York, 1965. 62 p.

Agricultural Development Council はアジアにおける農業発展の経済的・人的諸問題にかんする教育と研究を支持する団体で、J. D. Rockefeller, 3rd を理事長とする。これは、もと The Council on Economic and Cultural Affairs とよばれ、「中国の土地利用」の著者として有名な John Lossing Buck によって、戦後はじめられたものである。多くの日本の農業経済学者（わたくし自身も含めて）が、この Council の grant でアメリカに留学した。

本書の著者 Wharton 博士はこの Council の Singapore 地域代表として東南アジアに1958年から64年に至る間駐在、ベトナム・タイおよびマレーシアをカバーし、あわせて、マラヤ大学農学部のアgricultural Economics 客員教授をつとめた。現在、ニューヨークにもどり、Council の American Universities Research Program の director である。

かれは東南アジアに在勤中、あまたの論文を発表。わたくしは東南アジアにかんする農業経済学者として世界的に見て最もすぐれた1人だと思う。とくに、この Council の目的からして、かれは東南アジアにおける農業経済学の教育と研究の実態を最もよく知っているといえる。

本書「東南アジアにおける農業発展の研究」は、農業発展の研究についての研究の現状と問題点を明らかにしたものである。

本書が強調するところは、第1に東南アジアの農業経済学者の仕事は主として叙述的あるいはfact-findingなものにとどまっている。第2、東南アジアをとりあつかった欧米農業経済学者の仕事は、価値や制度を与えられたものとして、経済機構の機能分析にかざられる。第3、欧米農業経済学者による刊行物の多くは、理論的あるいはmodel-buildingにとどまり、それが

経験的事実によって裏づけられていない。第4、農業発展の初期段階をとりあつかった研究は、農民の価値・態度・動機についての研究にかけている。最後に、研究者のうちのmodel-buildersとempiricistsの間にギャップが大きい。

これらのことを、過去と現在の研究、農業の初期発展のモデル、東南アジアにおける農業発展の主要問題、現在の研究の欠陥、これからの研究の直面する問題などにわけて、論じている。参考文献として72冊ばかりあげられているが、著者の好みがわかって、おもしろい。

つぎのものが付録としてかかげられている。

(A) 東南アジア諸国の農業経済にかんする大学・政府機関・団体の国別一覧表

(B) 東南アジア農業経済にかんするアメリカ以外の大学・政府機関・団体の国別一覧表…この日本の項目では、アジア経済研究所（東京）と、University of Kyoto, Center for Southeast Asian Studies (Kyoto, with field office in Bangkok) との、ふたつだけだ。

(C) 東南アジアの最近刊行された農業経済学関係の文献目録

(D) 東南アジア農業経済学研究課題の優先順位についての提案

わたくしは、著者がいわんとするところは、だいたいに賛成だ。ただ、なぜかれの指摘する欠陥が生まれたかの分析が本書では十分でない。しかし、東南アジア農業経済研究の現状と問題点とについて、これほど明快に、しかもまとまって説いたものはない。この意味で、東南アジアの農業経済学研究の不可欠な、指導案内の役目をはたす入門書である。この成果を高く評価したいと思う。
(本岡 武)

United Nations: *Economic Survey of Asia and the Far East, 1964*. ECAFE, Bangkok, 1965. x+281 p.

ECAFE (Economic Commission for Asia and the Far East, United Nations) 事務局より毎年、ECAFE